2023年１月10日（火）
日本農業新聞に
弊社の肥料散布機の記事が掲載されました。

農Bizカンパニー

タイショー

肥料散布機を製造・販売

精密施肥で無駄削減

化学肥料の高騰で、散布時の無駄の削減や、堆肥などの有機質資材の活用が改めて注目されている。農機メーカーのタイショー（水戸市）は、こうしたニーズに応えられる肥料散布機を販売する。井坂博道常務は資材費の削減に加え、世界的な流れとなっている環境負荷低減に向けた製品の重要性を指摘する。

――生産現場の課題をどうみていますか。

やはり肥料などの資材価格の高騰が課題だ。当社も肥料散布機の試験用に肥料を購入するが、価格が以前の倍ほどになった銘柄もあり、生産現場の負担の増大を実感している。肥料を無駄にしない技術の重要性を、より強く感じるようになった。

肥料コスト削減の基本は、精密な散布による、余計な肥料の削減。当社の肥料散布機は、まきむらができにくく、設定した量を正確にまけることを売りにしている。

特に、畝に局所的に施肥できる散布機「グランビスタ」は、キャベツ農家から注目されている。正確な散布に加え、畝内の上層と下層の2段に分けて筋状にまけるのが特徴だ。作物の生育に合わせて肥料を効かせやすい。圃場（ほじょう）全面に施肥するより、大幅に肥料を削減できる。

――堆肥など、地域資源の活用もコスト低減対策として重要になっています。

有機質肥料の散布に適した肥料散布機「ブレンドソワー」が役に立つだろう。鶏ふんと化学肥料など、複数の肥料をホッパー内で撹拌（かくはん）しながら、均一にまける。粒状肥料やペレット堆肥だけでなく、菜種かすや米ぬかのような粉状の肥料にも対応する。有機質資材は投入量が多いため、2月にはホッパー容量を従来機より拡充し、500リットルにした製品を発売する。

――農業の環境負荷低減に向けて、どう対応しますか。

化学肥料の削減には、可変施肥機能の導入を検討している。土中の養分が多い場所に肥料を少なく、養分が少ない部分には多くまく技術だ。より施肥量を減らせるだろう。

同時作業による二酸化炭素（CO_2）排出量の削減も重要だ。耕うんと施肥、農薬散布、畝立てなどを同時にすることで、トラクターの燃料を削減できる。規模拡大が進む中、省力化にもつながるため、野菜農家を中心に広がっている。

肥料を畝内に局所的にまける散布機「グランビスタ」を紹介する井坂常務（水戸市で）

会社概要

1943年設立。肥料や農薬の散布機、水稲の育苗関連製品、穀類搬送機などを製造・販売する。従業員数は100人。売上高は24億円（2022年6月期）。